



# 平安だより

世田谷平安教会付属平安幼稚園  
2018年 2月号

## 「浅ましき手の望み」

牧師・園長 長村亮介

主よ  
この幼な児の手の  
なんと柔らかく  
愛らしいことでしょう  
私たちもまた  
幼な児の時には  
このような  
愛くるしい手を  
与えられていました  
そのことを思つて  
感謝いたします  
汚れなく  
悪意なき  
この小さな手を見てみると  
自分自身の手が  
浅ましく思われてなりません  
私の手は  
いつしか罪に汚れ  
怒りの拳となり  
どれだけ多くの人を  
悲しませてきたことか  
ああ主よ  
この幼な児が  
これから一生の間  
罪の深みに誘われることなく  
歩み行くことができますように  
御守り下さいませ

（『祈りの風景』三浦綾子）

かつて私が神学校を志した時の教会にも小さな幼稚園がありました。その園長であった老牧師も、子どもたち

に毎朝、「おはようございませ」と言つて握手をされていきました。子どもたちの小さな手が、あの老牧師のどこか威厳のある武骨な厚い手に包まれるのを、私は何か憧れのような思いを抱いて見ていました。

あの武骨な手は、愛くるしい無邪気な子どもたちの小さな手を守っているように私には見えました。それを思つて今、自分の手を老牧師の手に重ねて眺めて見てみると、その様子はまだまだはるかに遠く及びません。

上にご紹介した三浦綾子さんは、小説『氷点』でよく知られるクリスチャン作家ですが、そのご生涯は結核をはじめとして、様々な病に苦しめられた厳しいものでした。生きるのに負う荷が重ければ、それが健康のことでも、また人生のことであっても、神さまを憎んだり、人を羨んだりという浅ましさを、人は誰でも持つっているものだと思います。怒り、憎しみの拳を握りしめることのない人生というものもないでしょう。だから、いつまでも幼な児のような手で生きて行くことは誰にとつてもできることではありません。そこに人間の原罪があります。でも、だからと言つて、罪の深みに誘われて、その大波に飲み込まれてしまつてはならないのです。私たちを守つて下さる神さまから離れずに、罪に溺れてしまわなければ、いつかはささやかでも、幼な児の小さな手を包む、武骨な手にもなることができるのではないかと思います。

「病むもよい、私はただ神の聖意を知りたいと欲する。貧するもよい、私はただ神の聖意を知りたいと欲する。人に憎まれるもよい、私はただ神の聖意を知りたいと欲する。私の不幸の極みは神の聖意を知りえないことにある。私は疾病を怖れず、貧困を怖れず、孤独を怖れず、私はただ神に棄てられてその聖意が私に伝えられなくなることを怖れる。神よ、願わくは私にいかなる患苦の臨むことがあるうとも、あなたと私との間に霊の交通が絶えないことを。」

内村鑑三